

巻頭 オピニオン・インタビュー 15



Toyoshima Shinsaku

豊島晋作

テレビ東京 報道局 ニュースセンター
『News モーニングサテライト』キャスター
デジタル副編集長

テレ東BIZ

『豊島晋作のテレ東ワールドポリティクス』

ジャーナリストとしての立ち位置

ウクライナの現実を「戦争」と早くに喝破した『豊島晋作のテレ東ワールドポリティクス』。これは動画サービス「テレ東 BIZ」で、キャスターの豊島氏が専門とする政治学から少しマニアックに国際情報を解説するコンテンツである。「事実に基づいて報道しようとする姿勢」は視聴者からの信頼も高い。ジャーナリストとしてウクライナ戦争にどう臨んでいるのかを聞いた。

(構成：吉井 勇・本誌編集部、写真：古山智恵・本誌編集部)

テレ東の「個人主義」

— テレ東 BIZ『豊島晋作のテレ東ワールドポリティクス』を見た時、感情論ではなく、そこにある

背景、歴史を知ること、いろいろな角度からの視点を持つことの重要性を感じました。タイトルにご自身の名前が付いています。それだけの責任を背負っているということですか。

豊島 テレビ東京（テレ東）は他のキー局に比べて規模が小さいので、個人それぞれが得意な、あるいは興味を持った分野でコンテンツを立ち上げていった方がいいという事情があります。

— 日本最大級の経済動画サービス、テレ東 BIZ があったことは大きかったですか。

豊島 そうですね。地上波放送では難しいコンテンツにネット動画サービスとして取り組むのは、放送局が行えるアプローチの一つです。テレ東 BIZ のサイトやアプリにはテレ東・BS テレ東の人気経済番組や放送未公開動画、オリジナルコンテンツなど、これまでに動画約6万本が上げられています。

— テレ東 BIZ は個人の裁量で自由にできる。

豊島 地上波の場合、基本は全体的な方針をプロデューサーが決め、ディレクターが記事原稿を書き、デスクがチェックするという流れです。私の場合は原稿を自分で書き、デスク担当がチェックするという2つのステップで、英語の資料は国際部にチェックしてもらいます。ファクトチェックが基本で、確認できる事実であること、誰も無意味に傷つけないことなどが原則です。

商品のトレーサビリティが現代では求められています。報道でも同じようなニーズを強く感じます。



英文が多い資料を徹底して読み込む

巻頭 オピニオン・インタビュー 15

情報源や手の内をさらすようなことはあまりしたくないのですが、逆に、バイアスがかかっている可能性を認めて情報を出す方が聞いてもらえることもあると考えています。そもそも、世界中で悲惨な事がたくさん起きているのに、ウクライナ戦争だけを取り上げること自体がバイアスなのです。

義務教育で英語を勉強し、英語を理解する人がロシア語よりも圧倒的に多いわれわれは、どうしても西側のメディアの信用性を高く感じます。そうしたことも認めた上で大事なものは、私が知る限り最も真実に近いと判断して情報を伝えることです。

「率と数」の違い

—— 地上波とネットで視聴者の反応に違いはありますか。

豊島 デジタルコンテンツの配信では、その道に詳しい人たちが待機していて、配信した数秒後に反応が来ます。テレビ番組とは桁外れの速さで、コミュニケーションのテンポが違います。

—— こうしたリアクションをプラスに考えるタイプですか。

豊島 テレビ番組は1分当たりの折れ線グラフの視聴率と戦っています。動画配信が直面しているのは再生回数という実数で、戦いの指標は率から実数へ変わりました。視聴率だと、裏番組がヒット番組だったからとか、特別なスポーツイベントがあったからと言い訳もできますが、動画配信は条件がみんな一緒なので、再生されたか、されなかったか言い訳が利きません。再生回数が上がらずにへこむ人もいますが、私は繰り返しトライするしかないし、むしろ熱心に見てもらえたと、コメントや批判ほどありがたいと思うようになりました。

—— 『テレ東ワールドポリティクス』の方向性は調査報道という考えですか。

豊島 ジャーナリズムの一つがアクセスジャーナリズムで、権力者に食い込むタイプです。調査報道はチ

ームで長期にわたって綿密に取り組むので、人手もコストもかかります。テレ東にはそれだけの余裕がありません。こうした中で、私は調査報道になるべく近い考えを持ち、自分が接することのできる最大限の公開情報から何が得られるかに1週間あるいは2週間ほどで取り組み、それを語りで伝える作業をしています。

—— かなりのハードワークですね。

豊島 地上波の仕事もあるので少しハードワークですが、極めて明確な一国家による武力侵略を伝える瞬間に立ち会うのは稀有な経験だと思います。

瞬時に氾濫する SNS 動画と放送メディア

—— ウクライナ戦争は動画情報の氾濫で、誰もが戦場の様子を見られます。放送業界はこれまで、戦時下の膨大な情報が即時に伝わる事態と向き合ったことがありません。

豊島 戦場の様子がリアルタイムで世界を駆け巡るという SNS 現象はシリア内戦から始まったともいわれています。今回、本格化した要因は SIM カード(モバイル通信)が使える地域で戦闘が行われているからです。ロシア軍の兵士は情報統制によりケータイを自由に使えないようなので、主にウクライナ軍がウクライナ住民による撮影です。そのため、ウクライナ軍の優勢なシーンがほとんどで、劣勢であるシーンなどはあまりアップされていないという見方が広がっています。その面ではウクライナに有利に働き、戦意高揚効果も生まれています。

SNS の映像や情報について、メディアとしては記事に「could not be independently verified = 我々は独立して検証することができない」というただし書きを付けて載せることが多くなっています。メディアとしてなるべく避けたい表現ですが、事実である可能性が極めて高いがゆえに悩みながらも載せることを選択しています。本来なら同じシーンを撮影した複数人に確認するなどの検証をしますが、時間的にできないのが現状です。



YouTube・テレ東 BIZ『豊島晋作のテレ東ワールドポリティクス』より

—— 大量の動画情報を消費する社会をどう考えますか。

豊島 われわれメディアは、例えるなら食品加工業です。生の食材を加工して害のない食べ物（事実）としてユーザー（視聴者）に届ける。ところが、今は戦場の SNS 映像という加工前の生の食材がユーザーにダイレクトに届いています。この情報の洪水にメディアは今無力ですが、受け手側もこれだけ多くの情報が押し寄せると、どれが食べてよいものか疑う時期が来るはず。だから、メディアとしての信憑性、結果として信頼性、つまりブランドが大事になってきます。例えばニューヨーク・タイムズは「真実を追究し人々が世界を理解するのを助ける」というミッションを掲げています。『テレ東ワールドポリティクス』にできることは、なるべく鮮度の高い情報を出しつつ、信頼できる海外メディアや研究機関の報告書などを複数かつ十分に参照した上でメッセージを精査していくことだと考えています。

映像で戦争を同時体験する社会の課題

—— 小中学生も戦争を映像で同時体験しています。しかも、3年にも及ぶコロナ下です。人間形成に影響はないのでしょうか。

豊島 私はどちらかというと、戦場の様子が映像で即時に多くの人に共有されるメディア社会は好ましいと思っています。特定の人の苦しみをほかの人が知らない社会より、起こっていることが即時に広まり

苦しみが共有される社会の方が望ましいからです。ウクライナの痛みを同時体験的に感じることで、戦争を真剣に考える一つのきっかけにもなります。形式的な民主主義であれ、「民主国家の間で戦争はあり得ない」と言われてきました。しかし、実際に戦争は勃発し、平和とはかくも脆いものだ気付いたので。このリアリティを共有した方がより現実的に世界のことを考えられます。これまでの戦争の多くは“どこか遠くの知らない人たちの出来事”でしたが、今回は格段に強いリアリティがあります。シリア内戦と大きく違うのは、戦場が日本の小さな都市の街並みに近いというリアリティがあることだとも言えます。

—— そうなると社会での議論の仕方が重要です。

豊島 小中学生に対して取り得る対策は近現代史をきちんと教えることです。動画配信で感じていることは、変な陰謀論を信じたり、事実を自分の都合よく解釈したりすることの源流に近現代史への理解の欠如があることです。私は大学院で国際政治学を専攻していましたが、学びの根源に“今日の出来事は昨日に原因がある、昨日の出来事は過去に原因がある”というのがあります。数百年前の歴史を議論するのも大事ですが、例えば 10 年前から 30 年前の出来事を議論できる社会の方がより成熟していて、SNS の映像に振り回されない考えの軸が育つのではないかと思います。

—— テレビ番組でもネット動画でも伝える立場ですが、これからのメディアをどう描いていますか。

豊島 先日、若者から「テレビをつけるといつも途中から始まってしまう」と言われました。映像はタップした瞬間から始まるという“若者の当たり前”がある一方で、既存のテレビ放送に信頼を寄せる人もまだいます。ですから、そうしたブランドをきちんと守りながら若い世代にどう発信していくかが重要です。

—— 「テレビは途中から始まる」、動画体験の違いを象徴しています。ウクライナ戦争の不幸が一日でも早い終結へつながるよう、『テレ東ワールドポリティクス』に期待しています。

